

# 伊沢修二のアメリカ留学と台湾における教育実践

ジェニー・ヒートン

はじめに

伊沢修二(1851-1917)が明治時代の日本教育制度の近代化において大きな役割を果たしたことは言うまでもない。開発主義教授法の提唱者の一人である伊沢は日本の教科書の編纂をはじめ、音楽教育、体育、および吃音矯正事業でも有名である。伊沢が教授法と学校管理法の近代化における先駆者であったことはよく知られており、先行研究は膨大な数に及ぶ。代表的な研究として、小野次男著『アメリカ州立師範学校史』<sup>1)</sup>と橋本美保著『明治初期における教育情報受容の研究』<sup>2)</sup>を参考されたい。しかし伊沢のアメリカ滞在が、日本統治時代初期の台湾における伊沢の教育政策にも影響を及ぼしたことも忘れてはならない。台湾総督府学務部長心得の基盤となった伊沢の意志と教育観についての記述には、手つかずの問題が多い。本論文では、伊沢の留学先であるアメリカのブリッジウォーター師範学校における学びが、伊沢の台湾における教育実践にいかに関連しているかを考察したい。

## 一 学生としての伊沢修二

### 1. 渡米前

伊沢修二は、高遠藩生まれで五男五女の長男であった。苦しい貧困生活を送った一方、祖父内田文右衛門に読み書きや書を学び私塾で算数も学んだ。1868年17歳で伊沢は初めて江戸に出た際、洋学独習の良い手引きとなる書物を探し、英語の経済書や英和対訳辞書などを購入した。翌年は英会話力習得の志が強くなり、英学者を探したところ、英語に堪能な中濱万次郎(John Manjiro, 1827-1898)が土佐にいることを聞き、特別に教わることになった。伊沢はまず綴りから教わったが、1870年に勃発した普仏戦争に中濱が視察団の随員として派遣されることになり、やむなく講義は中断となった。そこで築地在住の米国宣教師C.カラブルス(C. Carrothers)に引き続き教授され聖書を読まされたという<sup>3)</sup>。

同年全国の諸藩より貢進生が召集され、大学南校で教育を受け、官吏に登用されることになった。横文字が理解できる者が優先されたが、当時は西洋の文字が解読できる者は非常にまれであった。伊沢は高遠藩の応募者のなかの一人であったため推薦された。1871年に明治政府は廃藩置県を断行し、従来の大学を閉校した後文部省を設けた。伊沢が属していた大学南校も廃止され、貢進生は皆退学することになり、見込みがある者は選抜され新しく創立された第一番中学に入学した<sup>4)</sup>。

1873年欧米巡視より帰国した文部大輔田中不二麿(1845-1909)が、学制の規定に従い七大学区の重要都市に官立師範学校を各一校創立した。こうして東京、愛知、大阪、広島、長崎、新潟、仙台に師範学校が設けられ、第二区の愛知師範学校長に伊沢が任ぜられた。伊沢は一旦志を立てて工部省に入っていたため即座に断ったのだが、文部省の御雇い教師フルベッキ(Guido Verbeck, 1830-1898)が『ぜ、チャイルド』という本を伊沢に贈り、「西洋の教育といふものは中々面白い事だと感じたのみならず(中略)全く教育事業も好まぬといふ訳では無いから、遂に再び文部省に入ること<sup>5)</sup>にしたと説明している。伊沢が赴任した学校には校舎がなく、旧藩の断罪所を使用する始末であったため、工部省で鍛えられた伊沢が腕を発揮し、自ら学校の設計にとりかかることになった。入学者の年齢は23歳の伊沢よりはるかに年長であり、国語と漢文の学力が優秀であったのに対し、数学ができるのは少人数に限られていたという。

教授法がまだ整わない時代であったため、伊沢は愛知師範学校訓導に在職した漢学者荒野文雄と協力し、『教授真法』という共著を著した。これはフルベッキが贈った本、又はD. P. ページ(David Perkins Page, 1810-1848)の教育書*Theory and Practice of Teaching*などを基にしたもので、伊沢が梗概を、荒野が細部を叙述した著書であった<sup>6)</sup>。同時期に、伊沢は幼稚園を設け、アメリカの唱歌に日本語の歌詞をつけて「蝶々」の歌をつくるなどの試みも行なった。その成果が文部省の監督として在職していたD. モルレー(David Murray, 1830-1905)の目にとまり、大いに感服させたという。翌年、初の米国派遣生として高嶺秀雄(1854-1910)、神津専三郎(1852-1897)と伊沢の三人が推薦されたが、伊沢を強く推したのは、伊沢の唱歌報告を見たモルレーであった。

## 2. 留学生活～ブリッジウォーター師範学校までの辿り道

伊沢は生涯の友となる高嶺秀雄と神津専三郎と横浜から米国東洋飛脚船会社のシティー・オブ・ペキン(City of Peking)に乗船、1875年7月18日出港し、8月5日、サンフランシスコに到着した。父文谷宛ての手紙にその詳細が描写されている。

恰も<sup>コロンプス</sup>閣竜子米国発見の時のごとく、皆亜米利加々々々と号びたり。しばらくして船金門の口に入れば兩岸の山々霧の中に出没して恰も描ける山水のごとし。唯恨むらくは、此辺の山々は皆秃山ばかりにて草木なければ、其景色美なりといへども趣を欠くものの如し。午後二時過グランドホテル館に泊り込む<sup>7)</sup>。

当時グランドホテル館よりはるかに豪華なホテルもあったが、三人にとっては初めての海外旅行であったため印象深い経験であったのだろう。サンフランシスコを簡単に観光した後、早朝の汽車でシエラネバダ・ロッキーの山系を縫って東海岸へ走る途中、シカゴ、ニューヨークに立ち寄り、神津の滞留先のオルバニーに行き、三人はそこで分かれた。伊沢は当

初、文部省からセイラム師範学校に入学する旨を伝えられていたが、自ら確認したところ、同校は女生徒のみのための学校であり、ブリッジウォーターの方が適切だと聞き、伊沢が後に計画変更を文部省に報告したのである。つまり、文部省は、事情を理解しないまま伊沢の派遣先をセイラムに指定したというありさまであった<sup>8)</sup>。この時は夏期休暇中であったため、9月7日、伊沢は入学試験を受け、ようやくブリッジウォーター師範学校に入学した。

当時、ブリッジウォーター師範学校学長は A. ボイデン (Albert Gardner Boyden, 1827-1915) であった。ボイデンはブリッジウォーター師範学校の三代目の学長であり、アメリカの教育制度における有力な教育者でもあった。実は、1800年代の半ばごろ、教育界は画期的な時代を迎えていた。アメリカの教育制度は政治運動、人口増加、アメリカ政府による教育用地の無償供給制度の導入など、大きな変化を遂げていた。そのようななか、マサチューセッツ州で教師養成の系統的教育が必要とされ、教育改革者の努力により師範公学校 (common schools、コモンスクール) が設立された。地域住民の財政的・物質的協力と州議会の財政から資金を調達し、マサチューセッツ州議会が教育委員会を設け、1837年にホーレス・マン (Horace Mann, 1796-1859) を教育委員長に任命した。マンは公教育を絶えず提唱していた。マンの教育政策の根底にあるのは、人間は、教育において自然法に従い完璧になることが可能であるという発想であった<sup>9)</sup>。ボイデンはこの概念を受け継ぎ、1860年より46年間、アメリカ初の由緒ある師範学校の学長を務めた。伊沢が在学中の時もボイデンが学長であった。

### 3. 大学の風景

伊沢が1875年にブリッジウォーター師範大学第86期生として入学した際、伊沢は41人の女性を含む59人の学生の一人であり、ビルマン2人と伊沢以外、当時は皆アメリカ人またはカナダ人であった。日本からの留学生としては史上初でもあった<sup>10)</sup>。女子は16-17歳から20歳、男子は18歳から23-24歳と、若々しいアメリカ人の学生の間で生活しているうちに、24歳の伊沢は「大なる一の教訓を得た、それは東洋風の老成主義が間違であることを悟り得た事であつた」<sup>11)</sup>と記述し、その数年後に次のような謝意を表した。

若々しく面白く暮したが可いと決心し、それから断然同生徒の仲間に入つて子供遊をした、勿論始の間はドウも気耻しかつたが、相手の者は寧ろ此方を當然と思ふからして、格別の困難は無かつた。此くの如く心を改めて、元氣克く仕事をしようといふ心持になつたのは、これまた此留学中に得た一大幸福であつて、今日では益々此心持を失はぬ様に努めてをる<sup>12)</sup>

伊沢が新しい分野、つまり教育管理法、音楽、体育、男女教育、視話法などの先駆者のひとりになったのは、この留学経験があったからと言えるのではないだろうか。

伊沢のブリッジウォーター入学直前に、マサチューセッツ州上院は設備の充実した学校を建設する旨のいくつかの法案を可決した。新教室、寮、蒸気暖房及び科学実験室など様々な新設備が設置された。寮は特に設備がよく、体育館や閲覧室があった上、寮部の個室ごとに二人住まいの設備が整えられ、私用の押入れ、絨毯、家具などがそろった贅沢な住環境であった。伊沢にとって最も「重なるもの」は男女合併教育であり、思春期であるにもかかわらず同じ教室で受講するだけでなく、寄宿舍さえ同一の建物であることであった。校長以下の教員も「男女生徒も皆平気でをり、然かも何等風紀上の汚點の無いといふことは、純東洋風の教育に育つた余の目に、實に甚だしく奇異に感せられたのであつて、當時の奇異の感は今尚ほその印象が消え去らぬ程深刻であつた」<sup>13)</sup>と伊沢が記述している。

#### 4. ボイデン校長の影響

校長のボイデンは教授の仕事のほか、校舎の増設工事の管理もしていた。彼は家族とともに寄宿舍の一部に住み込み、食事の際は家族を引き連れ先立って食堂に入り、続いて200-300人が同じ食堂に入った。皆が座った後ボイデンが食事の前の祈祷を始めると、静粛にしておらねばならず、小声の私語も許されなかった。しかし寄宿舍の日常は「一大家族たると殆んど異なる所が無かつた」<sup>14)</sup>と伊沢が回想している。ボイデンの没後5年目に当たる1919年にボイデンの息子アーサー・クラーク・ボイデンによって編纂された記念文集に、ある卒業生は次のようにボイデン校長を尊敬する言葉を寄せた。

あの頃の学園は若い男女、先生と学長が皆一つ屋根の下で家族として同居していた（中略）学長夫妻はもちろん「ボイデンパパ」と「ママ」と呼ばれ、その家庭的な呼び名には若者らしい忠誠心、愛と尊敬がこもっていた。（中略）後代に続いた学長にも偉人はいたが、ボイデン先生は何よりも素晴らしい「父」だった<sup>15)</sup>。

実は、ボイデンは熱心なクリスチャンであり、その教育観の根底には祈祷と信仰が不可欠なものとしてあった。毎日、聖書朗読、聖歌斉唱と祈祷は必修の教練であった。毎週日曜日の夜、生徒たちはボイデンの居間に集合させられ聖歌を歌った。ボイデン校長は道徳を生徒に伝授する適任者になる教師は必ず毎朝まず学校で聖書を読むべきだと固く信じたという。何より社会に対して高潔な任務を果たし社会事業に貢献することが教師の狙いだと生徒に教え込んだ。従って「教師は生徒に従順、公正な権威、正直さ、誠実、勤労、時間厳守、秩序、清潔、整然、黄金律に従わせ、公德を訓練させるべきだ」とボイデンが提唱したのである<sup>16)</sup>。

ブリッジウォーターでは、生徒に「正しい思考」を教え込むため生徒一人一人をよく理解し、各個人の知識習得方法に精通する必要もあると考えられていた<sup>17)</sup>。直観教授、つまり実物を用いて子供の視覚、聴覚、触覚、味覚などの感覚に訴え、教師と生徒の間答による実物

の理解を図るという教授法が実施された。感覚の訓練には正しい観察法、思考力、感情と行動が重要であるとする、直観の原理に基づいた実物教授・問答教授の方法は、ペスタロッチ主義教育思想を基礎にしていた<sup>18)</sup>。直観教授法の訓練はモデルスクール (model school) で行われた。教師の職業を尊敬し愛するべきだということも教えられ<sup>19)</sup>、ボイデンが1870年代の卒業生にそのことについて演説もした。

教員が真の成功をおさめる上で最も重要な条件は仕事を愛すること。第二は惜しみなく仕事すること。第三はすすんで自分を犠牲にすること。(中略) 生徒を愛しなさい。生徒の人生に深い関心を持ってなければ生徒のためになる見込みなどはないでしょう<sup>20)</sup>。

ボイデンが学生に要求する行動を自分自身にも要求したことは、学生にとって感動的な態度であった。卒業生の回想によると、「ボイデン校長は威厳のある存在であり、真剣で誠実な教師であった。そして自分のライフワークにたゆまぬ献身的な愛を注ぐことはボイデン校長にとって聖職であった。私たち学生にとってボイデン校長の精神は一生忘れられない印象を残した<sup>21)</sup>」という。

学生の描写によるとボイデン校長は「敬虔な信仰心、高潔な人柄、信念へのたゆまぬ忠誠心の持ち主であり、真に自己犠牲の精神を体現していた<sup>22)</sup>」とのことである。

伊沢は感想を以下の通り記述している。

…氏は訓育家で別に著述などは見無かつたが、其感化訓育といふものは有名であつた。同校に入学する者は大概ハイスクールから来て、年齢は十七八歳から二十歳位の青年であつて、中々荒っぽいもので(中略) 酒屋へ這入り込んでビールを飲む、森の陰に行つて煙草を吸ふ、けれ共一年間経つ間に何れも皆立派に止んでしまふ、二年目には真に飲酒喫煙の悪習なることを信じ、他に対してこれが廃止を勧告する様になるのである。かく殆んど人間を拵へ直すと評すべき程、ボイデン氏の感化力は偉大であつた。(中略) 今日は我国でも教育の事が開け、ボイデン氏の如き人もないではなからうが、當時の余には如何にも崇高に観えたのであつて、其師範教育が実に能く教育の真理を実際に行つて行き、教授法から訓育まで、事々物々に教育の真理が閃いてをつた、これが亦実に我々の、帰国後に於ける努力の目的となつた<sup>23)</sup>。

伊沢によるとボイデンの「感化力の偉大なることは、(中略) 理想的教育家の如何なるものなるかといふに就いて、其模範を得しめたと云つて可いのである<sup>24)</sup>」とのことである。アメリカ人在学生も同様に、ボイデン校長を失望させないため行儀に注意を払つたと述べている。

我々学生は、善良な生き方をするように〔教員の——引用者注〕優しいながらゆるぎない要求に応えようとがんばったおかげで、2年を修了したときには入学したときより偉大で豊かな人になって世に羽ばたいていった。ボイデン校長先生は校内での地位はもちろんだが、我々学生に言わせるとその人格において群を抜いていた。私は入学してから第一学期の前半は校長先生の「視界に入らない」ように注意しなさい、と警告されていたがそれは私なんかを見抜いてしまうからだった。そしてやはり見抜かれた。しかし我々新生はまもなくその鋭い目が澄んだ心の窓であり、私たち若者にありがちな些細な意地悪やいたずらの心を見抜き、私たちの奥から一番高貴で尊い部分を前面へ引き出す力を持っていることを悟った。まさに偉大な心の持ち主らしく、彼は私たちを最善のところまで育て上げ、それを維持させた<sup>25)</sup>。

伊沢もボイデンの物静かな躰の仕方に感動していた。

規則を守る者に対しては、格別何等の事もないけれ共、犯則が何遍も重なれば校長室に呼び寄せ、誠に莞爾たる顔付で「お前の犯則は啻にお前のみならず、他の者にも悪影響を興へるからどうか改めてもらひたい」と誠告する（中略）又毎夜の黙学時間が来れば、相図の鐘が鳴る、けれ共、一室には二人宛をるから、話がハヅム時などには聞き洩すことがある、其中に靴の音がコツリコツリとして、室の戸が静に開き、慈愛の結晶の様な顔が現はれて「他の者の邪魔になるから静にしてもらひたい」と云ひ、莞爾たる一瞥が興へられて扉の陰に隠れ去るといふ有様で其感化訓育の力の偉大なることは、誠に恐れ入ったものであった<sup>26)</sup>。

## 5. 宗教、愛国主義と教育～米国留学の感化力

ブリッジウォーターの在校生は「学生の心持とは校長をはじめとする教員と学校が掲げる道徳の精神に対する忠誠心である」と教え込まれ、卒業生は「特別に高潔な教養を以て世に出、アメリカの宿命を切り開き公益を促す」<sup>27)</sup>べきであると教わった。愛国主義の強い時代であったため、ブリッジウォーターの榮譽名簿に記載されるのは優等生ではなく南北戦争の戦没者の名前であった<sup>28)</sup>。伊沢のアメリカ滞在の間、1876年に選挙が行われ、南北戦争直後の激しい相互憎悪が目立ち、南部では投票者を脅迫するための民兵の訓練もしばしば行なわれていた。この民兵はレッドシャツと言ひ、戦後復興期に不満を持った南部人が編成した軍隊である<sup>29)</sup>。伊沢は民兵を観察し、南北間に残存する相互憎悪を愛国主義と勘違いしたせいか、感服して次のように述べた。

国民中一人モ、兵ニ為レナイモノハナイト申シテ宜シイ。何故カト云ヘバ、平日ノ教育ノ仕方ト云フモノハ、実ニ能ク届イテ居ル。私ガ、先刻申シマシタ精神ト云フモノハ、

小学ニ於テ余程善ク仕込デアル。(中略) 二三日ノ間ニ、忽チ軍隊ガ組立ラレテ、一週間モ、野原ニ出テ訓練スルト思ツタラ、ハヤ立派ナ兵隊ガ出来タ。(中略) 是ニ於テ米人ハ、誠ニ愛国心ニ富デ居リ (中略) 実ニ私ハ感喜シタコトデゴザリマス<sup>30</sup>。

1862年「アントランティック・マンスリー」(*Atlantic Monthly*)誌の表紙に「リパブリック讃歌」(*Battle Hymn of the Republic*)の歌詞が掲載されたほど、戦争と神と正義が関連づけられた時代であった<sup>31</sup>。この現象は伊沢にも共通していた。日本をはじめ、台湾でも唱歌体操を使用し、国家教育と軍人的精神を養成しようとした<sup>32</sup>。伊沢は次の通り唱歌体操の教育を説明した。

それから唱歌、体操の二科ですが、此唱歌といふものは、非常に台湾の学生は好みます。而かも上手だ。それは概して言つて見ますれば、内地の学生よりも、台湾の学生の方が遙か唱歌は上手であるです [ママ]。体操は或一部分では嫌ふが、学生は好む。生徒にやらして見ると、面白いから好む。嫌な人は、何で嫌ふかと云ふと、矢張り之も一の迷信から来ることで、日本の人が、台湾の学生に、体操を教へて、何にするのだらう。アレハ必ず兵隊にするに違ひない。兵隊になるのは、どうも堪らないといふので大層嫌ふ。否や日本には、沢山人が居りて、兵隊も沢山あるから、決してそんなことはないと言うても、どうもイヤそれでも、兵に取りはしないかと疑つて、それで嫌ふ。けれども段々喜んで来ました<sup>33</sup>。

伊沢が言っている体操は兵式体操であった<sup>34</sup>。その目的は明確である。「体操ヲ授クルニハ規律ヲ厳正ニシ姿勢ヲ齋整シ意氣ヲ充實シ運動ヲ活発ナラシメ以テ身体ト精神トノ健全ヲ保タシムルコトヲ要ス」<sup>35</sup>とある。唱歌も勅語の精神を反映し、『小学校唱歌集』などから「君が代」、「皇御国」、「蛍の光」が起用されるのが通常であった<sup>36</sup>。

## 6. 言語問題とその解決

ブリッジウォーターでは知的教育、道徳教育と体育が最も重要な課題とされた。伊沢は2年間の課程のなかで、読書、英文法、作文、スペル、地理学、算術、米国史、授業法、音楽、衛生、道徳と体育を学習することとなった。英語(国語)が最も重視されたのは当時の全国の学校で読書、作文及び演算が注目されていたからであった。南北戦争以後はマガフィー読本(McGuffey's Readers)が一般的に使用され、1年生向けの教科書から6年生向けのものまであり、レベルが次第に難しくなっていた<sup>37</sup>。内容は分節化をはじめ音調の変化、朗読の練習、それに有名な文学者や政治家の文章又は演説、聖書の抜粋などで構成されていた<sup>38</sup>。教科書のなかでは信仰、尊崇、親孝行、誠実さ、勇厳さ、及び節約が強調されていた。南北戦争の痕がまだあり、ヨーロッパからの移民の増加と西部開拓の時代であったアメ

リカでは、国家の結束を図るためマガフィー読本がどの師範学校でも使用された。マガフィー読本のみが州ごとの法律に従って構成されていたため、120万冊が使用され、伊沢がブリッジウォーターで学習した国語教科書もマガフィー読本だったと言っても問題あるまい。

この状況の下で伊沢は「勉強した結果、学科の成績に於いては敢へて彼地の生徒には劣らず、常に中以上の席次を占めてをつた」と記述している。伊沢にとって問題は学科の成績ではなく、英語の発音であった。「初はオランダ語を学び、後東京に出て、オランダ語の素地に成れる英語の先生に学んだなどといふ経歴で、随分ヒネクレタ英語でやつて来たのであるから、中々向ふの人に解る様に話すことが出来ぬ、これには非常に難儀をしたのであつた」<sup>39)</sup>と伊沢は述べている。

幸い、1876年の米国独立100周年記念に伊沢はペンシルベニア州のフィラデルフィア博覧会に派遣され、そこでアレクサンダー・メルヴィル・ベル (Alexander Melville Bell, 1819–1905) の発明を見学した。伊沢は次のように回想している。

希臘文字でも羅匈文字でも無い、一種奇態な文字の掛図が有つた (中略) これは啞子に教へる文字だといふことで、(中略) ボストンに居るグラーム・ベル氏 (中略) に就いて質ねたら可からうといふことであつた、此話を聞いて余は暗夜に光明を得た程に喜んだ、啞子にさへも、ものをいはせることが出来るならば、通常人の余が発音の矯正を受け得られぬ筈はない<sup>40)</sup>。

後にメルヴィル・ベルの息子グラハム・ベル (Alexander Graham Bell, 1847–1922) が伊沢に視話法という発音記号を教えた結果、伊沢は英語らしい発音が出来るようになった。ベルに学んだ効果は、次のようなものであつた。

正則なる英語の発音といふに止まらず、尚ほ他に偉大なるものが有つた、即ち視話法を学習したといふことであつて (中略) 台湾在勤当時、彼の新附の人民に国語を伝えるにも此法に依つた、のみならず今日余は、此法の原理を応用して吃音矯正法を組み立て、国語正音法を創開し、學術及社会事業に貢献することが出来る、これ皆偏に恩師グラーム・ベル氏の賜である<sup>41)</sup>。

## 二 台湾学務部長心得伊沢の教育政策の実施

### 1. 伊沢修二の愛国主義教育と徳性

帰国した後、伊沢は森有礼と同様当時の日本の世界的地位の低さに嘆き悲しんだ。

我国が世界各國間に於ける現今の位置は、悲むべし第三等国たるに過ぎぬのである、然れば我々国民は非常の努力を以て、是非共第二等国までには進めねばならぬ、それには



国民の国家的精神を發揮せねばならぬ、然れば又自然の順序として、国家的教育を必要とするといふのであつた<sup>42)</sup>。

当時の論争は国家主義と非国家主義を拠点にして展開され、伊沢は教育が国家主義に基づくべきであることを主張した。そこで国家教育社を創立し忠君愛国を教育の中心にしたうえ、修身においては忠愛孝悌を推進した<sup>43)</sup>。

アメリカで使用されたマガフィー読本の類の如く愛国の精神を養成するため、「先ニスベキハ論ヲ待タズ語学ニ於テハ我国語ノ優尚ニシテ最モ愛スベク最モ重ズベキモノナルコトヲ悟ラシメ之ニ由テ大ニ自尊ノ心ヲ養ヒ以テ愛国心ノ發達ヲ謀ルノ方法アラザル（後略）」と伊沢は述べている。更に、「読書ニ於テハ書中載スル所ノ人間百般ノ行為ニ就キ正邪ヲ判シ善悪ヲ弁ジ正義ヲ尊ビ（中略）各種ノ知識ヲ授ケ能ク之ヲ實用ニ施シ（中略）国家ヲ利スルニ便セシムルガ如キ方法アラザルカ歴史ニ於テハ特ニ我国史ニ就キ忠臣義士ノ遺勲ヲ表彰シテ正面ヨリ忠愛ノ志氣ヲ養成シ乱臣賊子ノ邪行ヲ指斥シテ反面ヨリ義氣ヲ激励スルガ如キ方法アラザルカ（後略）」<sup>44)</sup>と提案した。

当時国家教育社の勢いは最高潮に達し、社員数 7,000 人以上を誇った。政府は伊沢の団体の勢いが強まっていくことに危機感を抱き、国家教育社を解体させた。しかし、伊沢は提唱していた理念を実に深く信じ、そのため反対されても必ずいつか実施することを決心したようであった<sup>45)</sup>。そこで日清戦争で台湾が日本領になった際、伊沢は執筆した視話法の原理を応用した中国語のテキスト『日清字音鑑』を初代総督樺山資紀(1837-1922)に紹介し、是非とも台湾で教育制度を設けたいと提案した。樺山の許可を得、台湾学務部長心得に任命され自分の教育観を反映した教育を再び実施しようとした。

伊沢は台湾に到着後、子弟を集めるため、地元の人々に「自分が台湾に来たのは、戦争をする為ではなく奸細をするのでもない。お前達を日本帝国の良民にしようと思つて来たのである」と伝えて説得したという。「それからは非常に私を信じて呉れまして、それで先づ日本語を教へる教育の話などをして、毎日子供等に教へて居りました」<sup>46)</sup>とのことである。伊沢は、台湾が永遠に日本の領地になった以上、台湾人を日本人と「一視同仁」するべきだと主張した。台湾には日本人同様孔子の道に対する崇敬があり、「全く同教の国である」と論じた伊沢は、こうした考えにより、当時批判されたようである。伊沢は次のように反論した。

此頃も或所では新聞などにどうか狭隘なる国家主義を以て台湾の教育方針を過らぬやうにと云ふ忠告をして呉れたものが見えました。（中略）例へば勅語を——教育に関する勅語を彼等に授ければと言つても我天皇陛下——日本の帝室は実に一視同仁の朝廷である。古来他国より移住して来た所のものは誠に厚く御待遇があつてそれぞれ功勞のあるものは実に立派な所に御用ゐになつたと云ふことは歴史に歴々あることで斯様なことこ

そ実に教育勅語を台湾人に授けるに於ては第一に着眼せなければならぬ所である。(中略) だからして台湾に施すべき所の教化の方針如何と申しますれば私は混和主義より外に採るものはないと断言して宜しいと存じます<sup>47)</sup>。

後代の学務部長と違い、一方的に日本語を教授するのではなく、伊沢は当時としては珍しく、植民する民族である日本人の間で、被植民者の言語と文化の理解を勧めた。「それで第一着として我国語を彼に教へる彼れの言葉を我に習ふと云ふことは是が融和の第一着であります」<sup>48)</sup>。その上、伊沢は台湾教育の方針を定めた際、「思想交通ノ途ヲ聞クベキ事」、「文教ヲ尊ブノ主意ヲ一般人民ニ知ラシムベキ事」、「宗教ト教育トノ関係ニ重キヲ置クベキ事」、「文廟等ヲ神聖ニ保テ、且之ヲ尊崇スルコトニ注意スベシ」<sup>49)</sup>と忠告した。ポイデンのような熱心なキリスト教信者によって親切な待遇を受けた伊沢は、台湾に滞在するキリスト教の宣教師の待遇にも配慮し、「耶蘇教ノ宣教師等ヲ待遇スルノ方法ヲ誤ラザルヲ要ス」、「本土ヨリ派出セル各宗ノ布教師ヲシテ、適當ノ範圍ニ於テ布教セシムルヲ要ス」<sup>50)</sup>と指摘した。更に、ペスタロッチの直観教授法を含む、ブリッジウォーターで教わった教育法を適用した<sup>51)</sup>。「教育ハ人心ヲ根底ヨリ醇化スベキモノナレバ、各種ノ社會ニ涉リ深ク人情風俗ヲ察シ、之ニ適応スベキ教育法ヲ設クルヲ要ス。故ニ當初ニ在テハ、當局者特ニ此般ノ視察ニ注意セザルベカラズ。」<sup>52)</sup>と主張した。

伊沢は台湾で着任して間もなく樺山総督の台湾南部への巡視に随行することになり、従来の教育が「如何様であつたかを調査しようとして、第一に支那文教の淵源たる孔子廟に行き、帰途同地に永く宣教師をしてをつたパークレー氏を訪ねるといふことから、調査に着手したのである」<sup>53)</sup>と述べている。更に、キリスト教宣教師トーマス・パークレー(Thomas Barclay, 1849-1935)に伊沢が会見を求めたところ、伊沢が日本の探偵を同行でもしているのではないかと誤解された。伊沢は面会をためらったパークレーに、自分は「日本にをる時からして、貴君が永く台南にをって教育に従事されることを知つてをるので、今回の渡台を幸に是非御目にかかり、教を請ひたい」と述べて説得し、「種々の教育上の話をした」<sup>54)</sup>とのことである。

伊沢の台湾におけるキリスト教宣教師に対する待遇は、清朝後期台湾の官僚の態度とどう異なったのだろうか。1872年に台湾北部において最初の宣教師となったカナダ人ジョージ・マッケイ(George Leslie MacKay, 1844-1901)は、清朝後期台湾の官僚による待遇を次のように明確に述べている。

萬華の統治者は住民全員に対し、夷人宣教師に家屋をはじめとするいかなる種類の財産を売却したり貸与したりすることを死罪とする令を公布した。(中略) このような努力にもかかわらず、我らはなんとか粗末な小屋を借りることに成功した。(中略) 台湾北部初の小教会堂を建てたとき、萬華より兵士と巡査の群れが派遣され教会の建築停止を

命令した。銃・槍・小刀のような武器を持ち、素朴な村人たちをおびえさせるつもりで叫び、脅かしながら銅鑼を鳴らしたり太鼓を叩いたりしていた<sup>55)</sup>。

マッケイの記録によると、台湾巡撫劉銘伝のみが例外的で、宣教師に対しては非常に好意的であったということである。

伊沢が台湾の最初の学校、芝山巖学堂で教授した道徳もブリッジウォーターの教材を反映していた。実は、伊沢が著した『教育学』は、ブリッジウォーター師範学校長ボイデンの心理学講義の前半ノートをもとに書かれたものとされる。その講義は有名なキリスト教の弁証学者ホプキンス (Mark Hopkins, 1802-1887) の *An Outline Study of Man* (『人間研究概説』) に大きく依拠していた<sup>56)</sup>。しかし、伊沢の台湾における修身教育はボイデンの影響を受ける一方、教育勅語を中心としていたと言えるだろう。伊沢は最初に、作法および諸徳附例話十数件を引用し、礼儀作法を教授した。それは、挨拶、坐作進退、衛生、行儀作法など根本的なところから徐々に教育勅語の主意を貫徹させることだった。追って『台湾公学校修身書編纂趣意書』が出版され、題目名には従順、誠実、勤労、清潔、迷信、衛生、公德、公益、同情といった儒学の概念は勿論、ブリッジウォーターと類似した道徳項目も含まれていた<sup>57)</sup>。更に教育勅語を基にした道徳、即ち孝行、友愛、夫婦の和、博愛、朋友の信、謙遜、修業修学、知能啓発、徳器成就、遵法、義勇なども教授していた。

日本と台湾は「同教の国」であっても道徳の教授法は同様ではなかったのである。日本式教育の導入前の清朝末期台湾における書房および書院では、体罰が頻繁に行われていたにもかかわらず、生徒が先生に対して「恭敬の実なく、寧ろ甚だ喧噪になり」という状況であった。更に、「命令を犯したる者を懲戒する為に鞭撻の必要に備ふ、この竹箠に大小二種あり、罰の軽重により或は大なるものを用ひ、或は小なるものを用ふ、(中略) 非常の苦痛を感じると見え、(中略) 然れども教師は平気にして更に意に介せざるが如し (中略) 教師の暴権も亦甚し (後略)」<sup>58)</sup> という有様であった。

これに対して伊沢の当初の教育方針に従い、日本人教師は鞭を一切使用せずに授業を行っていた。

されば我が帝国占領後、教師が決して鞭撻を用ざるを見て、彼等は一旦之を怪みたるも、之によりて我が教師を信ずること一層深きを致せり、従って近来は、父兄にして少く心あるものは、従前の書房教師の殘刻なる管理法と、我が教師の管理法とを比較し、書房教師の暴を悟り、往々己が子弟の鞭撻せらるるに際しては、書房へ怒鳴り込みて、教師を詰責するものなどあるより、爾来書房教師も平常管理法に注意し、多く鞭撻を用ひざるに至れり、蓋、数年を出ずして、児童管理上に一大変革を來たすに至るべきや期して待つべきなり<sup>59)</sup>。

しかし、1897年に伊沢はやむを得ない場合に体罰を容認するという措置を取った。

…茲に一の学校管理上に付ての問題があります。之を序でに申して、諸君の御考を伺ひたいと思ひますが、ご承知の通り、今日現行の教育令では、「学校に於て、体罰を加ふることを得ず」ということになつて居ります。此体罰というものを加へるのは、善いか悪いかと云うことは、随分教育社会の大問題である。台湾に於ては、どうであらう。生徒を打つということをするが宜いか、せぬが宜いかということは、随分是も研究をしました。此頃の首席教諭の諮問会にも附しましたが、台湾には、体罰をやるが宜いということになつた。それは、なぜであるかと云ふと、台湾では、体罰というものは、当たり前になつて居ります。しかし台湾人は、人に打たれるのを、非常な恥とします。決して無頓着に打つたり、何かするのは、宜しくない。実に悪いことである。けれども教師丈けには、鞭撻を加へられて宜しいということになつて居ります。それでありますから、体罰を、存し置くを可としたのである。たとい許したからと云うて、それを屢々用ゐるやうな教師ならば、それは、逆も教師として長く置ける人じゃない。けれども体罰を行ふことは出来ぬぞといふことにすると、台湾の学校の管理は、私は立たぬと思ひます。従来体罰をやつて居るのみならず、体罰を以て導かぬと云ふと、どうしても宜い方に導くことは出来ない場合があるのです。此体罰は、矢張り行つて苦しくないといふことに、此頃の諮問会では、多数の意見でまりました<sup>60)</sup>。

ちなみに、20年間台湾に在住していたイギリス人が日本式学校の授業を参観した際、元来台湾の児童は不従順であると述べ、さらに次のような感想を述べたという。すなわち、「中々教師の一命令を聞いて直ちに身体を動かすものにあらず、然るに今貴校に來りて観るに、児童が毎時間点鐘につれて直ちに集合するは、予の驚嘆する所なり、蓋し教師の厳酷なる鞭撻よりして、此の如き良習慣を得るに至りたるものなりや否やと。」日本人教師は、「本邦小学校令によるも、児童に体罰を加ふることは、政府の嚴禁する所なり、従つてわが教員は、此の主旨を体にして児童を管理せり、何ぞ殊更に台湾児童に対して此の如き鞭撻を加ふることを為さんやと」返事をした。

最後にイギリス人参観者は「大にわが小学校教員の技倆に感じ、三嘆して去りしことあり」<sup>61)</sup>とのことであつた。つまり、伊沢もブリッジウォーターのボイデン学長と同様に、体罰より寛大な指導を以て生徒に自己管理と責任を持たせることに成功したと言えるだろう。

## 2. 芝山巖学堂の設備と男女の教育

伊沢が台湾で芝山巖の山頂にある廟を学堂として修復した際、建物を出来る限りブリッジウォーターの校舎を模範とした。台湾人の生徒が施設を次のように描写している。「最初の教室は芝山巖廟の後棟樓上に設けられ、(中略)教室を該廟の中堂左側に設け、神前の巨棹

を移して授業をされた」。日本人の教師がまた三人着任した後、「後棟左側の僧房を宿舍とし伊沢先生は楼上の右側に居られた」<sup>62)</sup>。ブリッジウォーターと同様、教員が学堂生と食事することもあった上、舎監もおり学堂生と接する時間も長く、結びつきが強かったという<sup>63)</sup>。

第一回生の柯秋潔の孫が当時の様子をさらに記述している。

授業は朝から夕方まででしたが、先生も生徒も芝山巖学堂に泊まり込んで、寝起きを共にしたこともあったようです。生活習慣からして違いますから、寝食を共にして通訳を介さずに身振り手振りで、だんだんと気持ちが通じるようになっていたのでしょう<sup>64)</sup>。

なお、ブリッジウォーターで最初に男女教育を「奇異に感じた」伊沢は、台湾で「どうしても、女子の教育といふことをやらなければならぬ」<sup>65)</sup>と決心したと言い、ボイデン校長の提唱した社会事業への貢献の目的を反映し、当時の反女子教育意識を改善する事業に全力を注いだ。伊沢が台湾人女子教育に着手したとき、そもそも台湾では女子を就学させる習慣がなかったのである。伊沢は数々の困難を乗り越え、台湾女子教育の「産みの親」と称されるようになり、台湾の女子教育は「伊沢の教育理念に影響されたものとなった」<sup>66)</sup>と認められている。1898年、芝山巖堂は国語学校第一附属学校と改称され、女子分教場が創立された。同年、女子分教場は国語学校第三附属学校と改称され、本科と手芸科が設置され台湾人の優秀な女子も学ぶことが出来た。同校は台湾で唯一の女子学校であった。当時は反日暴動が頻発しており、日本式の学校に通う台湾人もそのターゲットにされていた。走るのに不便な纏足の女児や赤ん坊を背負う女子の姿を思い浮かべれば、伊沢の女子教育に対する決意が実に立派なものだったと言わざるをえないであろう。

### 3. 台湾の言語教育のなかの視話法

伊沢が台湾に渡った時は無論日台の辞書も教科書もなかったにもかかわらず、伊沢はさっそく7月の始めごろから日本語を含めた科目を教え始めた。日本語を理解出来る生徒がいなかったため、まずは英語で教え、吧連徳という通訳者が台湾語に訳して伝える形になった。最初はアメリカのグラハム・ベルの下で学習した視話法を台湾で生かして日本人教師に台湾語を学習させようとし、台湾語会話の教科書と発音集『台湾十五音及字母表附八声符号』と『台湾十五音及字母詳解』を編纂した<sup>67)</sup>。伊沢は次のような様子で教師に教授した。

決して会話などは教へない。単に、台湾の十五音の母音と云ふやうなものにつき、八声の練習のみをやつた。朝から晩までバアバアバアバアとやって居りました。(中略)熱心に其れを習つて、黽勉努力した結果、幾等か真似が出来るやうになると、初めて耳が聞えて来るのです。凡そ人が言葉を習ふのは、耳からでは有りませぬ。幼児が(中略)一年も二年も母の口を能く見て、口がどう動くか練習して、然る後に[言葉を——引用

者注] 云ふのであります<sup>68)</sup>。

伊沢によれば、彼は視話法を習った後に試行錯誤を重ねていた。

日本へ帰つて来て、或は唾子に物を言はせることもやつて見た。それも可なりに成功している。又自分の英語も甚だ不完全ではあるけれども、大概英語と聞えるやうな正しい英語と言つても宜いだらうと思ふだけに出来るやうになつた。又支那語を学ぶ事に付てもこれを応用しやうと云ふ事も多年考へて居つた。台湾へ行つても台湾人に日本語を教へるとか、或は日本人に台湾語を教へる事に付ても、此法の字は用ひないが其主義は余程応用したことがある<sup>69)</sup>。

教科書に関しては、『新日本語集』を1896年、『日台会話新編』を1899年、と次々と教材を出版した。つまり、伊沢が適用した視話法は、台湾統治初期の日本語教育と台湾語教授をする上で、欠かすことのできない教育方法であった。

#### 4. 自己犠牲と教師の任務

先述のとおり、伊沢はブリッジウォーターに在学中、教師の事業は聖職同様であると教わり、ポイデンの犠牲的態度にも感化された。台湾の教育に取り組んだ伊沢のもとで教授した6人の教師が殺害された際、伊沢はショックを受けたが、後ほど6人の教師の死が西洋人宣教師の殉教とあまり相異がないと主張するようになった。もちろん、伊沢はキリスト教そのものとの類似を主張したわけではなく、殉教者の精神に共通点を見出し、それを提唱したのである。

…有名なる古田事件と云ふものがあつて、英国の宣教師が虐殺に逢つて居ります。アノ位な事は、耶蘇教の宣教師には常にある事だが、彼等是如何なる関係を以て、如何なる仕事をして居るかと言へば、我は耶蘇教徒なりと言つて、ただ教祖と信徒といふ関係を以て、行つて仕事をする所は縁も由緒もない、物好きに他国に行つて、それでも生命を棄てて顧みぬ有様である。之を我が、帝室と我々との関係に比すれば、泥雲の差ひである。我々が身体髪膚は皇祖 皇宗の恩沢に依りて出来たものである。我々の教化しやうと云ふものは、我々の力を以てするに非れば、我が君の民とする事の出来ぬ所に行くのである。実に之を以て頼みて見ましたならば、此の身体の如きものは、誠に些細な話で、何でもない。即ち我が君に捧げてこそ、始めて教育者の本分を尽くす事が出来る<sup>70)</sup>。

伊沢は6人の教師の殉死について「名譽の死を遂げて呉れたと嬉しく思ふ」と述べ、まるでキリスト教の殉教者のような熱意を語っているかのようであった。

伊沢は6人の死を美談とした。

若し我々が國難に殉ずるといふ様な事もあらば、そ[れ]は台湾子弟に対して、日本国民たるの精神を具体的に宣示する者であつて、他日教壇に立つて、看よ日本人は、身を殺して仁を成すこと斯くの如きを、といふを得るであらう、然らば又、汝等も亦帝国臣民たる以上、断じて利害の為に順逆を誤るべからず、我々日本人は昔時からして、正義を守りて國民たるの道を完うした、(中略)六士の忠君愛國の精神の高潔なることは、実に聴者をして感奮興起せしめるに足るものがあつた<sup>71)</sup>。

6人の教師の死により、いわゆる「芝山巖精神」が誕生したことになる<sup>72)</sup>。

伊沢の学務部長在職は短期間であつたにも拘わらず、後代の在台湾日本人教師に大いに影響を及ぼした。伊沢のボイデン学長に対する気持ちと同様、1回生の柯秋潔も伊沢を尊敬していた。柯秋潔の孫柯徳三は下記の通り記述した。

師範学校出身の[日本人]の先生の月給が十八円ぐらひでしたから、伊沢先生は台湾の教員にその二、三倍もお金を出したことになります。そうやって、台湾人自身の手で日本教育を普及していくことを奨励しました。

このように祖父は、ずいぶんと優遇してもらいましたから、伊沢先生に対して、本当に恩義を感じていたと思います。(中略)祖父は伊沢先生や楫取先生に対しては、尊敬の念を抱いていたということ以外に、言うことは恐らく何もないでしょう<sup>73)</sup>。

この現象についてもブリッジウォーター時代に遡ってみると、ボイデン校長の感化が見えてくると言わざるを得ない。即ち、ボイデンは卒業生に「あなたは、住んでいるコミュニティーの生活の主体者になれ。そして州、国家、人種の生活の主体者にもなれ。あなたの人生は将来の世代の大河の支流になるべきである」<sup>74)</sup>と語ったことから伊沢も同様に考えた。伊沢は教師を募集した際、自分のためではなく台湾教育の将来を考えてこうした姿勢でのぞむよう呼びかけた。

我々教育者となつて尽くす所のものは、今日より百年の後の事を考へて尽力せねばならぬと思ふ。決して一朝一夕の仕事ではない、百年の後にして始めて之を全く教化する事が出来やうか。其の百年は今日の一時一刻より始まるのでござりますから、寸時も今日は徒費する事が出来ぬ時であると考へます。将来何れ台湾の教育に従事する人も出来ませう。然らざるも間接に台湾の教育に尽くさるる人も出来ませうが、私共の望む所は台湾に向かつて尽くす人は、全く献身的の考へを以てやつて貰ひたい<sup>75)</sup>。

さらに、伊沢の下で学んだ一回生柯秋潔が教師になった際、「男性はもちろん、女性の教育にも熱心でした。(中略)祖父は、自分の子供達だけでなく、様々な台湾の人達に日本の教育を施そうと全力しました。祖父はその一生を教育に捧げた人であったのです」<sup>76)</sup>と孫の柯徳三が回想しているのである。

#### おわりに

伊沢はブリッジウォーター師範学校学長ボイデンの感化力に深く傾倒した。ボイデンとブリッジウォーターは伊沢の教育観、教授法、及び教育管理の概念に多大な影響を与えたと言っても過言ではない。この影響は前述の通り、伊沢の日本における教育政策を始め、日本による台湾統治初期の教育にも見られる。

ボイデンも伊沢も、教師の任務は生徒、社会、国家の事業に貢献することであると信じていた以上、自己犠牲の精神をもつことが理想的であると固く信じていた。ボイデンが“Remember that you must be willing to be forgotten.”（「自分が生徒に忘れられることも覚悟すべきだ」）と言ったにもかかわらず、ボイデンの貢献と同様、伊沢の貢献も決して忘れられていないのである<sup>77)</sup>。伊沢のボイデンに対する気持ちに関しては同様であった。伊沢はボイデンと一生連絡を取り合い、ブリッジウォーター師範学校の創立記念祭の際、“I have the honor to congratulate you on your seventy-fifth birthday, as your only son in the land of the Rising Sun.”（「日出づる国の唯一の息子として七十五歳のご誕生日をお祝いすることが出来て大変光栄に思っております」<sup>78)</sup>という暖かい挨拶を述べた。2010年には、ボイデンの貢献について記した1923年出版の著書が再版され、いまだに貴重な資料として用いられている。台湾では第一回の講習員の卒業生、国語伝習所で学習した台湾人卒業生の間で「伊沢によって植えつけられた教員の開拓者的精神と探究欲」が年々歳々根付いていき、伊沢による台湾初の日本語学校の創立より100年を経た1995年、創立百周年式が挙行され、伊沢と後代の教師の貢献が認められた。社会貢献を重視したボイデンと伊沢は成功したと言えるのではないだろうか<sup>79)</sup>。

#### 註

- 1) 小野次男『アメリカ州立師範学校史』学芸図書株式会社、1987年。
- 2) 橋本美保『明治初期における教育情報受容の研究』風間書房、1998年。
- 3) 伊沢修二君還暦祝賀会編『楽石自伝教界周遊前記』1912年（復刻版、図書刊行会、1980年）13-14頁。
- 4) 文部科学省『第一編、近代教育制度の創始と拡充』第四章、第一節、4頁。
- 5) 伊沢修二君還暦祝賀会、前掲書、21頁。
- 6) 上沼八郎『伊沢修二』吉川弘文館、1969年、51頁。
- 7) 森下正夫『伊沢修二——明治文化の至宝』伊那市教育委員会、2009年、19頁。
- 8) 上沼、前掲書、63頁。



- 9) Susan Ritchie, “Horace Mann” (Unitarian Universalist History and Heritage Society, *Dictionary of Unitarian and Universalist Biography*), <<http://uudb.org/articles/horacemann.html>> (2015/4/6 アクセス). “Most of Mann’s educational policies stemmed from his belief in the perfectability of humanity and society through adherence to naturally revealed moral law. In his view, education allowed persons to discern the ethical demands of natural law, thereby creating a responsible and moral citizenry.” (“The Right Sort of School,” *The Common School Journal*, Vol. IX, February 1, 1852, No. 2, p. 31; “Value of a Schoolmaster,” *The Common School Journal*, Vol. IX, February 1, 1852, No 3, p. 41.)
- 10) Albert Gardner Boyden, *History and Alumni Record of the State of the Normal School, Bridgewater, Mass., to July, 1876*, Alumni Record (Boston: Noyes and Snow, 1876). 1873年には、Birmah からの Yahbah が卒業し、伊沢と同じ 1875 年には Burma からの Moug Tway が卒業したほか、総人数の記録のなかでカナダ人 1 人とノバスコシアからの学生 3 人もいたと記録されている。この本はブリッジウォーター師範学校の歴史をまとめたものである。学校の歴史について問い合わせがあった 1876 年に、アルバート・ガードナー・ボイデンの手によって編纂された。ボイデンは 1848 年から 1915 年に同校に在籍し、うち 1860 年から 1906 年まで学長を務めた。
- 11) 伊沢修二君還暦祝賀会、前掲書、30 頁。
- 12) 同上、31 頁。
- 13) 同上、26–27 頁。
- 14) 同上、34 頁。
- 15) Arthur Clarke Boyden, *Albert Gardner Boyden and the Bridgewater State Normal School: A Memorial Volume* (Arthur H. Willis: Bridgewater, Mass., 1919), p. 143.  
原文：“At that time the school was one great family of...young men and women living together with teachers and principal living under one roof.... The Principal and his wife were “Pa” and “Ma” Boyden of course, and into those two homely words were crowding the loyalty, love and respect which leaps so spontaneously from young life.... Succeeding principals may be great men but Mr. Boyden was a great father.”
- 16) Ibid., p. 54.  
原文：“Any teacher of competent ability and good morals...trains his pupils to obedience, to rightful authority, to truthfulness, honesty, industry, punctuality, order, cleanliness, neatness; to observance of the Golden Rule; to good behavior.”
- 17) Albert Gardner Boyden, *op. cit.*, p. 129.  
原文：“The processes of education are instruction, teaching and training. Right thinking is secured by the right use of these processes. The product of right thinking is mental power and knowledge.”
- 18) ベスタロッチについての先行研究は枚挙にいとまがないため、ここでは詳述しない。中野光『大正自由教育研究の軌跡——人間ベスタロッチーに支えられて』（学文社、2011 年）、浜田栄夫編『ベスタロッチー・フレーベルと日本の近代教育』（玉川大学出版部、2009 年）、J. H. ボードマン著／乙訓稔訳『フレーベルとベスタロッチー——その生涯と教育思想の比較』（東信堂、2004 年）、森川直『ベスタロッチー教育思想の研究』（福村出版、1993 年）などがある。
- 19) Albert Gardner Boyden, *op. cit.*, pp. 134–135.  
原文：“It is believed that the school is every year approaching near to the true standard of what a Normal School should be. While it aims to impart knowledge with thoroughness, it places a greater value upon right training. It tries to send out teachers who shall love and respect their profession.”

- 20) Arthur Clarke Boyden, *op. cit.*, pp. 130–131.  
原文：“The first condition of true success is that you love your work...The second condition is that you be willing to work...The third condition is that you are willing to sacrifice...have love for your pupils. You cannot hope to do them good unless you feel a personal interest in their welfare.”
- 21) *Ibid.*, p. 146.  
原文：“[Boyden’s] dignified presence, his earnestness, his sincerity, and his untiring devotion to his life work—to him a sacred calling—could not but make a lasting impression upon every student of the school.”
- 22) Arthur Clarke Boyden, *op. cit.*, p. 20.  
原文：“A man of strong religious feeling, pure character, an unflinching devotion to principle, with a ‘real heroic abnegation of self.’”
- 23) 伊沢修二君還暦祝賀会、前掲書、32–33 頁、35 頁。
- 24) 同上、32 頁。
- 25) Arthur Clarke Boyden, *op. cit.*, pp. 144–145.  
原文：“We [students] were held strongly and gently to the Way of Life and at the end of two years were sent out into the world greated and enriched by [the teachers]. Supreme because of his position and most of us believe because of his excellence was Mr. Boyden the Principal. I was told the first half term not to get “within range of his eyes”; that they were deep and would look right through me. They did. But we all discovered soon that those eyes were windows of a fine soul that not only could scotch out the petty meanness and wickednesses of girls and boys at our age but could gently and strongly bring to the fore the best and noblest thoughts. Like all great souls he pushed us to our best and kept us there.”
- 26) 伊沢修二君還暦祝賀会、前掲書、34–35 頁。
- 27) Arthur Clarke Boyden, *op. cit.*, p. 147.  
原文：“loyalty—loyalty to the leaders of the school and loyalty to the principles of the school which they learned to appreciate and admire.”
- 28) Albert Gardner Boyden, *History of Bridgewater*, p. 161.
- 29) この民兵に関する先行研究は枚挙にいとまがないためここでは詳述しないが、次のような代表的な研究がある。  
George C. Rable, *But There Was No Peace: The Role of Violence in the Politics of Reconstruction* (Athens: University of Georgia Press, 1984); Nicholas Lemann, *Redemption: The Last Battle of the Civil War* (New York: Farrar Strauss & Giroux, Paperback, 2007); Ball, William Watts. *The State That Forgot: South Carolina’s Surrender to Democracy* (Indianapolis, IN: The Bobbs-Merril Company, 1932); Eric Foner, *Reconstruction: America’s Unfinished Revolution, 1863–1877* (New York: Harper & Row, 1988; Perennial Classics, 2002).
- 30) 伊沢修二「国家教育ノ本旨ト軍人的精神ノ養成」(1891 年)、信濃教育会編『伊沢修二選集』信濃教育会、1958 年、539–540 頁。
- 31) Claghorn, Charles Eugene, “Battle Hymn: The Story Behind The Battle Hymn of the Republic,” *Papers of the Hymn Society of America*, XXXIX.
- 32) 伊沢、前掲「国家教育ノ本旨ト軍人的精神ノ養成」536–540 頁。
- 33) 伊沢修二「台湾公学校設置に関する意見」(1891 年)、信濃教育会、前掲『伊沢修二選集』624

- 頁。
- 34) 男子の体操には「普通体操」と「兵式体操」があり、女子には遊戯があった。伊沢修二君還暦祝賀会、前掲書、266-269 頁、275-276 頁。当時の兵式体操については、岸野雄三編「兵式体操」『近代体育文献集成』第十五巻、日本図書センター、1982 年。
  - 35) 伊沢修二君還暦祝賀会、前掲書、266 頁。
  - 36) 台湾教育会編『芝山巖誌』台湾教育会、1933 年、48 頁。
  - 37) Richard D. Mosier, *Making the American Mind: Social and Moral Ideas in the McGuffey Readers* (New York: King's Crown Press, 1947); John H. Westerhoff, *McGuffey and His Readers* (Nashville, TN: Abingdon, 1978); Benjamin Franklin Crawford, *The Life of William Holmes McGuffey* (Delaware, OH: Carnegie Church Press, 1974); "William Holmes McGuffey," The Walter Havighurst Special Collections Library, Miami University Libraries, Henry H. Vail, *A History of the McGuffey Readers* (Cleveland: The Burrow's Brothers Co., 1911) など。
  - 38) *McGuffey's Sixth Eclectic Reader*, (New York: John Wiley & Sons, 1879) に下記の抜粋が掲載されている。"Speech before the Virginia Convention" (Patrick Henry); "The Memory of Our Fathers" (Lyman Beecher); "War" (Charles Sumner); "Speech of Paul on Mars' Hill" (Bible); "God is Everywhere" (Joseph Hutton); "God's Goodness to Such as Fear Him" (Bible); "The Puritan Fathers of New England" (F.W.P. Greenwood); "Necessity of Education" (Lyman Beecher); "The Quarrel of Brutus and Cassius" (William Shakespeare); "Political Toleration" (Thomas Jefferson); "Massachusetts and South Carolina" (Daniel Webster); "Objects and Limits of Science" (Robert Charles Winthrop); "Franklin's Entry into Philadelphia" (Benjamin Franklin) ほか類似のものがある。前書きに言語音、音調変化、アクセント、強調、劇的朗読及び手真似も紹介されている。
  - 39) 伊沢修二君還暦祝賀会、前掲書、27 頁。
  - 40) 同上、36 頁。
  - 41) 同上、38 頁。
  - 42) 同上、172-173 頁。
  - 43) 同上、179 頁。
  - 44) 同上、179-180 頁。
  - 45) 同上、204-205 頁。
  - 46) 台湾教育会編『台湾教育沿革誌』1939 年（複製、青史社、1982 年）、13 頁。
  - 47) 伊沢修二「新版図人民教化の方針」(『教育報知』初出、1898 年)、信濃教育会、前掲『伊沢修二選集』640-641 頁。
  - 48) 同上、639 頁。
  - 49) 台湾教育会、前掲『台湾教育沿革誌』6-7 頁。
  - 50) 同上、7 頁。
  - 51) 伊沢がアメリカで学習した内容は、著書『学校管理法』(白梅書屋、1882 年)と『教育学』(丸善商社、1883 年)に反映されている。台湾で適用した教授法については、台湾教育会、前掲『芝山巖誌』48-54 頁を参照。
  - 52) 台湾教育会、前掲『台湾教育沿革誌』8 頁。
  - 53) 伊沢修二君還暦祝賀会、前掲書、212 頁。
  - 54) 同上、213 頁。
  - 55) George Leslie MacKay, *From Far Formosa* (New York: Fleming H. Revell Company, 1896), p. 165,

p. 149.

原文：“The authorities of Bang-kah issued proclamations calling on all citizens, on pain of imprisonment or death, not to rent, lease, or sell either houses or other property to the barbarian missionary...in spite of all their attempts to prevent our entrance I succeeded in renting a low hovel...when the walls were about three feet high a company of soldiers and constables sent from the prefect in Bang-kah arrived and ordered the work of chapel-building to cease. They were armed with guns, spears, and knives, and by beating gongs and drums, yelling, threatening, they thought to frighten the simple-minded villagers.”

- 56) 森田尚人「伊沢修二の『進化論』と『教育学』を読む——明治初期教育学と進化論」『小西中和教授退職記念論文集』第383号、2010年2月、2頁。
- 57) 台湾教育会、前掲『芝山巖誌』51頁。白柳弘幸「植民地下台湾における修身科教育」『台湾教育研究会通説』No. 31、24頁(140.109.185.220/pdf/eduhis31.pdf)。
- 58) 町田則文「台湾に於ける創業時代の教育(三)」黄文雄／江旭本編『台湾論』拓植大学、2002年、301頁。
- 59) 同上、301-302頁。
- 60) 伊沢、前掲「台湾公学校設置に関する意見」625-626頁。
- 61) 町田、前掲書、302頁。
- 62) 台湾教育会、前掲『芝山巖誌』8頁。
- 63) 篠原正巳『芝山巖事件の真相』和鳴会、2001年、122頁。
- 64) 柯徳三『母国は日本、祖国は台湾』桜の花出版、2005年、34頁。
- 65) 伊沢修二「台湾教育に対する今昔の感」(台湾教育会における講演、1908年)信濃教育会、前掲『伊沢修二選集』、656頁。
- 66) 洪郁如『近代台湾女性史』勁草書房、2001年、89頁。1902年に国語学校第三附属学校は国語学校第二附属学校と改称し、台湾に於ける子女の教育の模範となった。その後、1910年に国語学校第二附属学校は国語学校附属女学校と改称され、艋舺公学校の校舎を借りて台湾女子教師の養成所となった。1922年には台北州立台北第三高等女学校と改称され三高女と呼ばれた。現在は中山女子高級中学となっている。
- 67) 藤井影二「台湾における伊沢修二の音声教育」『台湾教育史研究会通説第十六』2001年9月、6-13頁。呉宏明「伊沢修二と視話法～楽石社の吃音矯正事業を中心に～」『京都精華大学紀要』第26号、2004年3月、151頁。
- 68) 伊沢、前掲「台湾教育に対する今昔の感」652頁。
- 69) 伊沢修二「視話法について」(1901年)、信濃教育会、前掲『伊沢修二選集』772頁。
- 70) 伊沢修二「国家教育社第六回定會演説」(『国家教育』47号初出、1896年)、信濃教育会、前掲『伊沢修二選集』595-596頁。
- 71) 伊沢修二君還暦祝賀会、前掲書、219-220頁。
- 72) 台湾教育会、前掲『芝山巖誌』92-101頁参照。
- 73) 柯徳三、前掲書、51頁。
- 74) Arthur Clarke Boyden, *op. cit.*, p. 136.

原文：“You are to be a factor in the life of the community in which you live, and in the life of the State, the nation, and the race. Your life is to be tributary to the great stream of life that is flowing on into the generations which are to come.”

- 75) 伊沢修二「台湾の教育」(『国家教育』54号初出、1895年)、信濃教育会、前掲『伊沢修二選集』588頁。
- 76) 柯徳三、前掲書、80頁。
- 77) Arthur Clarke Boyden, *op. cit.*, p. 136.
- 78) Wing-kai To, “Bridgewater Normal School and Isawa Shuji’s Reforms of Modern Teacher Education in Meiji Japan” 関西大学編『東アジア文化交渉研究』第2号、2009年、414頁。ボイデンは同年他界した。
- 79) 『百年老校, 士林國小壹百年紀念傳輯』(紀念特刊全文) 1995年6月1日。  
<[http://school.naer.edu.tw/book.php?action=book\\_group\\_list&page\\_id=8&book\\_group\\_id=1](http://school.naer.edu.tw/book.php?action=book_group_list&page_id=8&book_group_id=1)>  
(2015/4/6 アクセス)

